

小山内時雄

近代諸作家追跡の基礎

津輕書房刊

近代諸作家追跡の基礎

昭和五十六年十一月二十日印刷

昭和五十六年十一月三十日発行

定価一万八千円

著者 小山内時雄

印刷者 青木 勇

発行者 高橋 彰一

青森県弘前市徒町十六番地福井ビル

津 輕 書 房

電話〇一七二一三三一四二番
振替秋田二三七四番
郵便番号 〇三六

近代諸作家追跡の基礎

目次

I 年譜之部

葛西善藏年譜 付 年譜資料……………11

葛西善藏参考文献目錄……………66

福士幸次郎年譜……………91

福士幸次郎参考文献目錄……………146

II 著作年表之部

佐藤紅緑著作年表……………157

大塚甲山著作年表……………199

秋田雨雀著作年表……………222

北村小松著作年表……………252

平田小六著作年表 付 参考文献……………264

菊岡久利著作年表……………271

今 官一著作年表……………275

III 雑誌細目之部

『開文雜誌』	297
『田舎新誌』	301
『学友通信』	306
『文 華』	319
『東 奥』	320
『東奥文学』	326
『東奥叢誌』	330
『新東奥』	332
『浦の月』	335
『菅 菰』	338
『善知鳥』	344
『蘭菊会廻覧誌』	348
『波 茶』	359
『東 北』	371

『手 捏』	387
『素 描』	396
『黎 明』	398
『あすなろ』	469
『胎 盤』	473
『新 緑』	480
『わらはど』	544
『星座図』	545
『信号燈』	547
『座 標』	550
『蒼白き詩線』	594
『文学ABC』	596
『群 鳥』	597
『作・評』	604
『芝 生』	606

『東北文学』……………610

IV 資料翻刻之部

大塚甲山詩集『蛇蛻』（稿本）覆刻……………641

後記……………971

近代諸作家追跡の基礎

年譜
書誌
稿本

I

年譜之部

葛西善藏年譜

付参考文献目錄

明治二十年（一八八七年） 一歳

一月十六日 青森県中津軽郡弘前松森町百四十一番地に、父葛西卯一郎（壬申戸籍では字一郎、三十歳）、母ひさ（二十六歳）の長男として生れた。

善蔵の曾祖父善司（久左衛門長男）の代にはすでにここに在住し、粧造味噌、荒物小間物、塩小売、小売米、穀物を商つてゐたことが、明治五年の「陸奥津軽郡弘前松森町」戸籍簿によつてわかる。善司は享和二年（一八〇二年）に生れ、明治七年（一八七四年）六月、七十三歳で隠居、明治十四年一月十一日、八十歳で歿した。

祖父善吉は天保三年（一八三二年）生れであるが、家督を継いだのは明治七年四十三歳の時で、五十二歳の明治十六年二月十七日に歿した。

父卯一郎は安政五年（一八五八年）の生れ。二十六歳で家督相続、善蔵が生れた時は米仲買を業としてゐたといふ。

母ひさは文久二年（一八六二年）生れ。青森県第二大区十小區（現在、南津軽郡）碓ヶ関村百二十四番地農（土族ともいはれる）佐々木三治の長女。十六歳で卯一郎に嫁した。（明治十年三月二十一日入籍届出）家事を見習はずに葛西家に嫁し、嫁した後裁縫その他を習得したといひ、また、実家に帰つては長子といふことで家長が坐る横座に坐るほどの勝気な人であつたといはれる。善蔵はこの母のことを作品の上ではほとんど語つてゐない。善蔵が生れたとき、家には、曾祖母だけ（八十歳）、祖母

かよ（五十歳、弘前和徳町田中松太郎長女）、叔母あさ（十八歳）、長姉いそ（十歳）、次姉ちよ（六歳）の二姉がゐた。

明治二十一年（一八八八年） 二歳

○四月二日 叔母あさ（明治三年へ一八七〇年）生れ、祖父善吉四女）青森県東津軽郡青森町（現在、市）米町六十番地 境三郎治長男治三郎に嫁した。

明治二十二年（一八八九年） 三歳

○一月三日 曾祖母だけ死亡、享年八十二歳。

一家北海道に移る。前年二月十八日、家宅を他人に譲渡、残つた畑地をこの年三月三十一日に譲渡してゐる点から、改造社版全集年譜および二十一年渡道説はとらない。（村井ちよ、境みわ、談より推定して大森澄雄編年譜は「初秋」とする）

「姉を訪ねて」（『人間 大正一〇・七』）に依れば、三歳の時、すなはちこの年後志国寿都郡寿都に移つたことになつてゐる。

しかし寿都町役場に葛西一家が居住したと証するものがないが、姉ちよの話では確かに住んでゐる。

○十一月二十日 弟勇蔵生れる。

明治二十四年（一八九一年） 五歳

八月十一日 北海道嶋牧郡本目村^{ほんめ}二十番地から、青森県東津軽郡青森町（現在、市）大字莨町三十番戸に転籍。寄留、青森県平民秋本宇吉方同居。本目村に移り住んだ時期は不明である。

明治二十六年（一八九三年） 七歳

一月九日 北津輕郡五所川原村（現在、市）二百三十番戸に転籍（青森町役場明治二十六年除籍簿）、五所川原村同年除籍簿には三百三十番戸借家とある。

○二月一日 長姉いそ、上北郡野辺地村大字野辺地五百十三番戸平民納谷仁三郎長男徳松に嫁した。

四月 五所川原尋常小学校に入学。これまで翌二十七年に本籍を碓ヶ関村に移し、同所に居住、四月入学となつてゐる年譜もあるが、五所川原村三百三十番戸から南津輕郡碓ヶ関村大字碓ヶ関四十八番戸（佐々木三治方）に転籍したのはこの年五月三十一日であるから、はじめ五所川原尋常小学校に入学し、二ヶ月ばかりで碓ヶ関小学校に転校したものと考へられる。「小学校も五所川原にしばらく上りましたよ」といふ談話筆記（少年の日）『東奥日報』大正一五・一二・一三）とも合致する。

○十二月二十六日 長姉いそ、野辺地五百十三番戸納谷徳松と離婚復籍届。

明治二十九年（一八九六年） 十歳

○一月十日 蝦名家に嫁した叔母はる死亡。

○四月二十四日 長姉いそ、北海道古宇郡杵村佐藤種吉と婚姻届出。

明治三十年（一八九七年） 十一歳

三月 碓ヶ関尋常小学校修了。

四月 同校補習科入学。

○四月二十六日（旧三月二十五日） 祖母かよ、六十歳で病歿。「父の葬式」（『中央公論』大正一二・一二）にこの祖母のことが出てくる。

この年、駅前の字山神堂八十八番地一号に移つた。父が田中勇三のあとを引き継いで、（それまで会計をやつてゐた）鉄道運送店「丸本」三立社支店を経営することになつたからである。田中勇三の母つるは弘前富田町六十六番地村谷勘右衛門の姉であり、つるの末弟末吉が卯一郎の伯母に當る祖父善司の養女ふでの婿養子であつた関係で引き継いだのである。

明治三十一年（一八九八年） 十二歳

○五月二十五日 母方の曾祖母きよ死亡。

十一月二十三日 石田政蔵が雇教員として碓ヶ関小学校に着任。善蔵はその感化影響を多分に受けて居り、「火傷」（『文章世界』大正八・四）「埋葬そのほか」（『改造』大正一〇・七）に描かれた人である。

明治三十二年（一八九九年） 十三歳

三月 碓ヶ関尋常小学校補習科二年卒業。間もなく五所川原村に質屋を営む神重三郎の手伝をした。祖父善吉の長女で父卯一郎の姉にあたる伯母しま（安政三・一一・一七〜昭和一三）が、明治十四年五所川原の医師神祐益の後妻となつたが、先妻の子

明治三十四年（一九〇一年） 十五歳

○九月十七日 叔母なみ（父の妹） 原田平蔵と協議離婚届出。

明治三十五年（一九〇二年） 十六歳

初めて上京、新聞売子の傍ら夜学に通ふ。母病氣のため止むなく

帰郷。

七月十一日 母ひさ、流産が因で死亡。享年四十一歳。「年内に継母を迎ふ」（板東三右編年譜）

明治三十六年（一九〇三年） 十七歳

冬、岸三吉・泉某と北海道に渡る。鉄道の車掌勤務、営林署、坑木伐採などで働く。また歌志内に叔母夫婦（北川治助・はる（母ひさの妹））が居り、同地を訪ねてゐる。

明治三十七年（一九〇四年） 十八歳

○三月七日 長姉いそ、岩手県紫波郡日詰町六十番戸平民咲山鶴松二男久治郎と婚姻届出。

明治三十八年（一九〇五年） 十九歳

再び上京。

八月二十八日 哲学館大学（東洋大学の前身） 大学部第二科普通講習科に入學。（大森澄雄編年譜による）

「この年下谷区谷中茶屋町の魚商柿沼金太郎方に下宿し、金太郎の姪染谷そめ子およびその弟欣坊（本名不明）と知り合ひ、数

にたか、竹之助姉弟あり、たかは重三郎を婿として分家して質店を開業してゐた関係からである。伯母しまは「無心に」（『文章世界』大正八・一〇）「父の葬式」（『中央公論』大正一二・

二）「落葉のやうに」（『婦人公論』大正一三・六）に描かれたが、心に思ふことは率直に言ふ人であつたため葛西にはこはい

伯母であつた。医家であり寺小屋もやつてゐた神家には生家である商家とはまた違つた雰囲気があつたらうことは見逃せない。

青森市へ丁稚にやられたが商人を嫌ひ、また東京に出て勉学するやうになつたのも、短かつたが少年期をこの家で生活した影響と思はれる。神家の土蔵の二階には多くの書籍が置いてあり、

十三歳の善蔵は『三國志』『椿説弓張月』『里見八犬伝』などをここで愛読したといふ。「僕が大きくなつて文学をやるやうになつた素因は矢張り五所川原の少年時代の生活當時に作られたものといへますね」（『少年の日』）と語つてゐる。

○十二月十三日 次姉ちよ、北海道岩内郡利手野舞納村字浜中番外地村井岩次郎と婚姻届出。

明治三十三年（一九〇〇年） 十四歳

○八月三十一日 長姉いそ、佐藤種吉と協議離婚届出。

「この年或は三十四年、青森市米町四十一番地便利屋『仲利』（中村利助経営）の小僧となつた。」（境みわ談による大森澄雄編年譜）

青森市へ丁稚に出たことは、「酔狸州七席七題」（『中央公論』大正一三・六・一五）の第二話「鏡」に見える。